

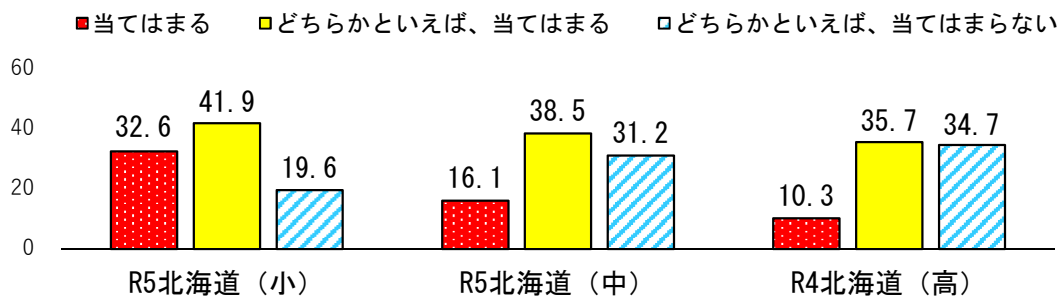
(2) 12年間を見据えた望ましい学習習慣の確立

○ 小中高の学習習慣の状況と今後の方向性

〔小中高の学習習慣の状況〕

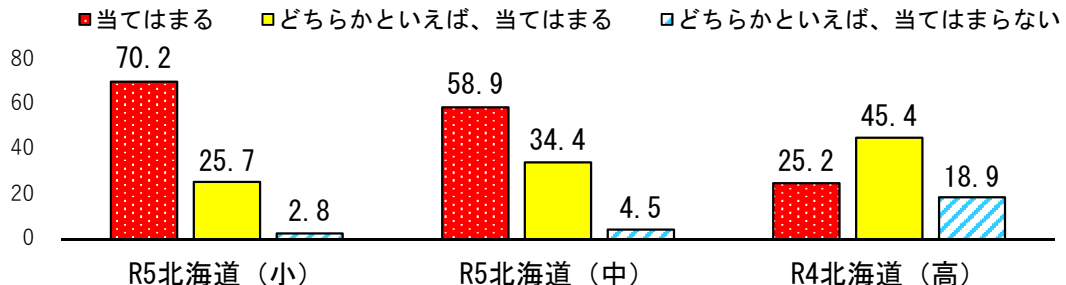
- ※R5北海道（小）、R5北海道（中）は、令和5年度（2023年度）全国学力・学習状況調査のデータを掲載しています。
- ※R4北海道（高）は、道教委が独自に実施している令和4年度（2022年度）北海道高等学校学習状況等調査のデータを掲載しています。
- ※令和4年度（2022年度）北海道高等学校学習状況等調査は、道立高等学校等の第1学年を対象とし、令和5年（2023年）2月から3月までの期間に、全国学力・学習状況調査質問紙調査と同様の質問項目などについて調査するものです。

□ 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）



- ・家で自分で計画を立てて勉強をしている児童生徒の割合は、小学校で約3割、中学校で約1.5割で、高等学校では約1割となっています。

□ (小・中) 学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。
(高) PC・タブレットなどのICT機器を活用して、自分にあった学習ができていると思いますか。



- ・ICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う児童生徒の割合は、小学校約7割、中学校約6割となっています。
- ・ICT機器を活用して、自分にあった学習ができている生徒の割合は、高等学校で約2.5割となっています。

〔今後の方向性〕

- 上記の状況を踏まえ、望ましい学習習慣の確立に向け、次の2点をポイントとして、取組を進めましょう。
- ・ **発達の段階に応じた学習計画**の立て方や学び方を指導すること。
 - ・ 家庭学習における **ICT機器の活用**による個別最適な学びの充実を図ること。

※次のページ以降、小・中学校における学習習慣の確立に向けた取組について、有識者による分析と考察を掲載しています。

質問紙調査

ICT機器を活用した学習 状況等の改善に向けて

北海道教育大学旭川校准教授 山中謙司氏
(元国立教育政策研究所学力調査官・教育課程調査官)

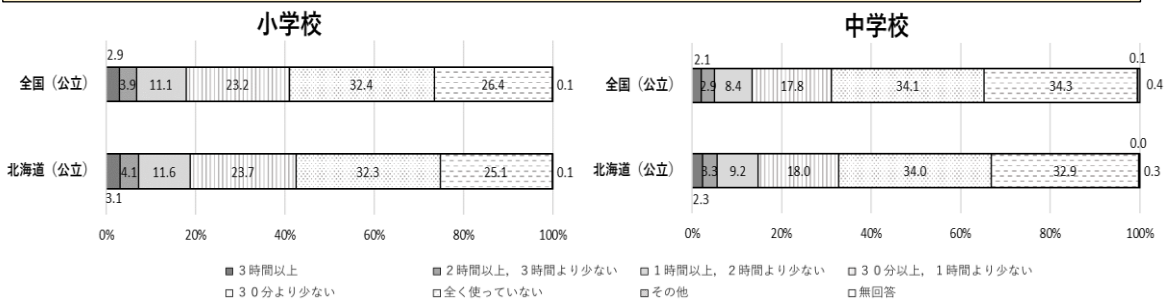
調査結果から見られる特徴的な成果と課題

◇…成果 ◆…課題

- ◇ 自分で計画を立てて家で勉強をよくしている児童生徒の割合が全国と比較し高い状況。
- ◆ 学校の授業時間以外に、普段、1日当たり1時間以上ICT機器を勉強のために使っている児童生徒の割合が全国と共に低い状況。
- ◆ 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると回答した児童生徒と学校の割合には乖離がある。

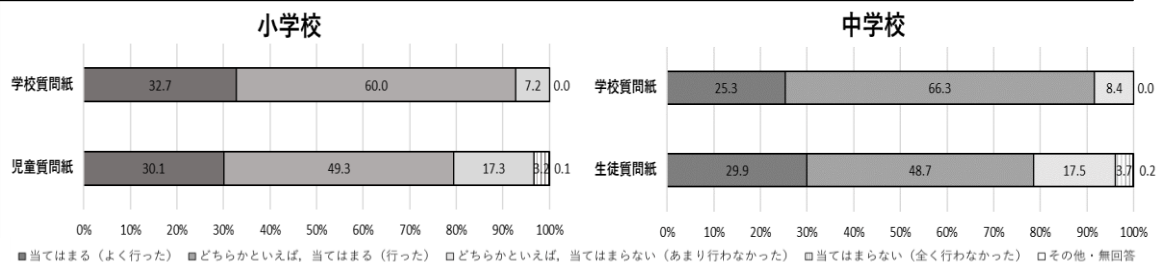
調査結果の分析内容

学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどのICT機器を、勉強のために使っていますか(遊びなどの目的に使う時間は除く)



児童(生徒)質問紙：5年生(1、2年生)までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

学校質問紙：調査対象学年の児童(生徒)は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか



家で計画的に学習できている児童生徒の割合は全国と比べ高くなっています。また、授業時間以外に普段(月曜日から金曜日)、1日当たり1時間以上ICT機器を活用して勉強する児童生徒の割合は全国に比べ高い一方で、その割合は全国とともに2割未満と低いことから、家庭学習におけるICT機器の有用性や必然性を捉えることができていることが考えられます。

課題の解決に向けて主体的に学習に取り組むことについて、学校質問紙(教師)と児童生徒質問紙で肯定的に回答している割合に10ポイント以上の乖離が見られることから、児童生徒が自分の学習を客観的に振り返り、学習の成果を自覚できていないことが考えられます。

課題の改善に向けて

○ ICT機器を活用した個別最適な学びの充実

発達障害の可能性や不登校傾向のある児童生徒、特異な才能のある児童生徒など、児童生徒の特性が多様化する中で、すべての児童生徒の可能性を最大限に引き出すことを目指して、「そろえる」教育から「伸ばす」教育への転換が求められています。

そのためには、児童生徒一人一人の特性や学習進度に応じて、指導方法や教材の柔軟な提供といった「指導の個別化」や、興味・関心に応じた学習活動や学習課題に取り組む「学習の個性化」が必要とされています。「もうすでに分かっている子」も「ついていけないと感じている子」も「他の方法で取り組んでみたい子」も同じペースで同じことを皆で求めるといった一斉授業から、児童生徒一人一人の多様な幸せ(well-being)の実現を目指した「個別最適な学び」の提供が求められます。

しかしながら、児童質問紙(35)や生徒質問紙(39)と学校質問紙(31)では、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていると回答した児童生徒と、児童生徒一人一人に応じて学習課題や活動を工夫したと回答した学校の割合には乖離があります。児童生徒が「個別最適な学び」の中で学んでいることを実感できるようにするためには、より一層「個に応じた指導」への授業改善が求められます。

このような「個に応じた指導」への授業改善を実現するには、紙ベースで一人の教師が授業を進めるといったリソースでは、限界があることが考えられることから、ICT機器の活用を図ることが大切になります。

○ ICT機器を活用した家庭学習の充実

「個別最適な学び」による「学習の個性化」では、学びが授業時間や教室内部といった制限のある状況だけではなく、開放された時間や空間が必要になります。家庭での学習はその1つになります。

学びが授業時間だけで終わることなく、家庭学習と連動するためには、右の例のように、家庭学習で自分なりの視点をもってICT機器を活用して必要な情報を収集し、授業では収集した情報を基に分



「ICT機器を活用した家庭学習を位置付けた授業展開の例」
(小学校6年理科「てこの規則性」)

析、まとめをしたり、新たな学習問題を見いだしたりする活動を位置付けます。そうすることで、時間をかけた主体的な家庭学習を通して、単に教科書に示されている個別の知識の獲得にとどまらない深い学びの実現が期待でき、家庭学習におけるICT機器の有用性や必然性を児童生徒が捉えることができるようになりますと考えられます。

○ ICT機器の活用による学びの高まりを自覚する振り返りの充実

児童生徒が自分の学習を客観的に振り返り、成果を自覚できるようにするためには、学習前後の自分を比較できるように振り返りの場を充実させることが大切です。同時に、自分の学びを客観的に捉え、次の学びにつなげるメタ認知に必要な力も求められます。例えば、毎時間の振り返りを共同編集可能な設定にしたスプレッドシートに入力することにより、他者の振り返りの様子も捉え、参考にしながら、自分の学びを見つめ直すことができます。

まとめ

○ ICT機器の活用を目的とするのではなく、手段として効果的な活用を図りましょう！

ICT機器の家庭への持ち帰りにより、誤った利用が危惧されるといった声も聞かれます。ICT機器を持ち帰ることを目的とするのではなく、学習の個性化を図った上で児童生徒が自分の興味・関心に基づく異なる目標の達成のために必要な学習を家庭におけるICT機器の利用といった状況で可能とする授業改革が行われることを期待しています。